

勉強に来た来訪者は、当初、何が問題となっているのか分からず、戸惑いの連続ともなるだろう。だがやがて、博物館見学という「常識」を成り立たせていた抑圧が、眼前で解き放たれる。目から鱗が落ちる、とはこのことだ。

博物館という制度のなかでは、いわゆる未開社会が「当然」の展示対象となってきた。ところが、非西洋が描いた西洋の姿は、なぜか「博物館」という容器から排除される。反対に非西洋世界では、西洋世界が博物館の展示物となることは稀だ。(西洋)美術品と(非西洋)民族資料を区別する基準はどこにあるのか。日本の刀剣はまさにその境界例だが、それを飾る十九世紀の大英博物館の日本展示風景を復元展示している、この民族学博物館とは何なのだろう。展示を展示する入れ子構造のなかに、文化関係の偏務性が露呈し、「視」に組み込まれた権力関係が納得される。それは視線の無垢を喪失した現代という失楽園の「原罪」の姿にほかならない。

*『異文化へのまなざし』展は98年1月27日まで国立民族学博物館、その後世田谷美術館へ巡回

連載⑩

異文化へのまなざし

まなざしに注がれたまなざしをめぐる文化展示の哀歌

国際日本文化研究センター 稲賀繁美

稲賀繁美
Inaga Shigemitsu

現在吹田の国立民族学博物館では、開館20周年を記念して、「異文化へのまなざし——大英博物館コレクションにさぐる」が開催されている。出品総点数1万点に達するという意欲的な展覧会だ。導入部の写真パネルの洞窟を、お宮参りのように潜ってゆくと、だんだんに時間が遡及する。はてなと思ったころ、タイム・トンネルの先には、百年前の大英博物館の展示風景が忽然と現れる。不思議なノスタルジーと違和感。

(当時最新鋭の)白熱灯下の古色蒼然たるショー・ケース中に、かつての大英帝国の異文化へのまなざしが凝固されている。

普通、展覧会といえば、展示物を通じて観客が何らかの知見を得る、教育的な仕組みだ。いわば観客は受け身となり、情報を注入されることを期待する。ところがこの展覧会は、そうした常識を覆すことを訪問者に要求する。これは展示物を眺める展覧会ではない。むしろ展示物に注がれた視線そのものを問い直す試みといってよい。敢えて言えば、展示されているのは、大英帝国がアフリカやオセアニアに注ぐ視線であり、逆にアフリカやオセアニアのヨーロッパ観である。「お